

和紙だより

■目次

越前和紙への提言 橋口侯之介さん	1
活動紹介 NPO法人PIARAS	2
レポート 和紙文化in越前	3
和紙ミニコーナー	4
情報欄	4

越前和紙への提言



■橋口 侯之介(はしぐち こうのすけ)
1947年、東京都生まれ。上智大学文学部史学
科卒業。出版社勤務を経て、74年、岳父が昭和
初期に開いた和本・書道・文系学術書の専門店
「誠心堂書店」(東京神田)に入店し、84年から
店主となる。東京古典会会員。成蹊大学大学院
文学研究科非常勤講師。著書「和本への招待」
(角川選書)、「江戸の本屋と本づくり」(平凡社ラ
イブラリー)、「和本入門 一千年生きる書物の世
界」(平凡社)など。

■橋口侯之介さん(和本研究者・誠心堂書店店主)
「和紙と日本人の書物観」

●よく残っている日本の本
日本は世界的に見て、古
い書物や文書がよく残っ
ている国で、そこには素材
としての丈夫な和紙と化
学変化を起さない墨と
いう最強の組み合わせが
ありました。ヨーロッパの
古い本は重厚な皮装幀で
すが、日本の場合逆で、
軽薄短小。しかもメンテナ
ンスがしやすい。和本を長
年扱っていますと、本の所
有権ではなく、「この本は
未来永劫に残しておくべ
きもので、それを私は一時
的にお預かりしている」と
いう感覚が随所に感じら
れるのです。西洋の革製の
本はとも素人では直せ
ませんが、和本は比較的
簡単な装訂なので、読ん
でいる最中に表紙が壊れてしまったり、糸が切
れた場合など、簡単なレヴェルの直しなら自分
で直すことが出来ます。

店内の様子。和本は立たないので平積みにする。



ヨーロッパの大学に匹敵する素晴らしい所だ
という表現をしています。応仁の乱でも、貴族
は疎開するために、大八車に本を乗せて逃げ
回ったそうです。十一世紀当時の実物が残って
いない「源氏物語」を、今私達が読めるのも、こ
うした日本人の書物観とそれを支えた和紙が
あったからこそなのです。

●本の格と多様な装訂・紙の使い分け

奈良・平安時代は、漢文で書かれたものが最
も格が高く、必ず「卷子かんす」巻物にして
保管することが義務づけられていました。これ
らは、本物という意味の「本」の階層に位置づ
けられます。日常の話し言葉に近い仮名で書か
れた「物語」は、「源氏物語」といっても、「本」に
対して格下の「草」でした。「草」の本は規範か
ら自由でしたから、気軽に読めるように冊子
本「草子」にした。中世になると平安の物語
は古典として「草」から「本」に格上げされます
といいますが、平家物語や太平記などのもつと
下の本が出てくる。これらは始めにテキストが
あって本になったのではなく、琵琶法師などの
語りが先です。室町時代には、民話や昔話を集
めたお伽草子など、面白い本がいろいろ出て来
る。時代を経る毎に、「草」だったものが格上げ
されて「本」になり、その下に又新しい「草」が出
てきて、本の世界がまた活性化するという構
造です。装訂も正式の卷子本から、より読みや
すく、修理がしやすく、ハンディな「折本」「粘葉
装」「列帖装」等が考案され、江戸期の「袋綴
じ」に繋がっていきます。

紙は平安時代、朝廷管轄の「紙屋院」が取り仕
切り、楮紙、檀紙、斐紙、雁皮紙等が使われま
した。宮廷の女性もこれらの上等な紙を使う

ことが出来たので、薄様の美しい染紙や継ぎ紙
の文化が開かれました。楮紙でも打紙をして
斐紙風にしたようです。一方、漉き返しも常識
で、歌を詠むのは白いきれいな紙を使いますが、
命令書などの日常の文書は薄墨色の漉き返し
と決まっていました。越前産に代表される鳥の
子の厚様は写本用紙の中でも最高級品で、裏
写りせず表裏に
絵や文字を書く
ことができるので、
私家本などにも
よく使われ、江戸
時代の豪華な「奈
良絵本」は、大名
や裕福な商家の
嫁入り道具の一
つでした。



鳥の子に写本された豪華な「奈良絵本」

●花開いた江戸の出版文化

十五世紀のグーテンベルクの印刷術より、ずつ
と早くに活字印刷技術が中国・朝鮮で実用
化され、日本にもこの「古活字版」と呼ばれる
技術は秀吉の頃に伝わっています。一時、壮麗
な「嵯峨本」として、雅な文学の伝統を江戸期
に繋げたと言えますが、日本の文字の多様さ
や文字同志の繋がりは活字にすると、膨大な
労力を要したため、木版による整版印刷に
戻ってしまいました。戻るといふより、むしろ
より合理的な選択をしたと言えます。木版は
絵も字も入れることが出来、書体や紙面のデ
ザインも自在に出来ます。

木版による商業出版は、江戸期も後半になる
と、京都・江戸・大阪を中心に約七百年の出
版元、年間出版点数は千点を数え、上位の「物

之本」の他に、仮名草子、好色本、浮世草子、談義本、洒落本、人情本、滑稽本、咄本を始め、寺子屋の教科書、生活の便利帳、諸国案内など、多種多様な大衆本が花開きました。女性の識

江戸後期の草双紙を数巻合わせた読み物「合巻」。揃うと表紙が一枚の絵に。



絵入り大衆本「黄表紙」

字率も高く、貸本屋もありましたし、海賊版を取り締まるための団体や法律もありました。書籍用紙は美濃が

主な産地だったようで、出版元は紙問屋と長期契約し、紙の安定供給を図った。私が調べたところによると、新刊二冊あたりの紙代は、平均四十三・二%と決して安くはありませんでした。安い本には漉き返しが使われました。

今でも、東京と京都では毎週市があり、ごくごく和本が出て来ます。明治二十年代に出版界が和本から完全に洋本に入れ変わりました。本の豊かさとは何かと問う時、和本とその書物観を何らかの形で継承したいものです。

この本は印刷用紙に書かれた文字を
この本は印刷用紙に書かれた文字を
この本は印刷用紙に書かれた文字を

あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ

自ら運営する変体仮名サイト
<<http://www.book-seishindo.jp/kana/>>

■NPO法人 PIARAS 手漉き和紙を普及する会

手漉き和紙を普及する会「PIARAS」とはいろいろな言葉の頭文字。P=PAPER・POWER・PEACE、I=IMAGINE、A=ART、R=RELAX、A=ALIVE、S=SACRED。要は新しい想像力、アート心、ライブ感覚で、和紙を広める活動をワイワイ楽しくやろう！ということらしい。

代表の木南裕美子さんは、大学卒業後、大手電子メーカー勤務を経て、結婚と同時にちぎり絵を始め、「ハクビ和紙ちぎり絵学院」の教授免許も取った。ところがふと気がつくとうまく漉き和紙についても、ちぎり絵についてもよく知らない。一念発起し、武蔵野美術大学通信教育課程芸術文化学科造形研究コースに入り、衰退する手漉き和紙の復興に二役買ったちぎり絵普及の歴史を、精力的に調べ卒論にまとめた。「卒論で調べたことや問題意識を何か和紙の役に立つ形で展開できないか」と考え、二〇一二年四月、NPO法人を設立した。

現在、正会員十三名、賛助会員企業二社。奈良県での「吉野宇陀紙を学ぶ」スタディーツアー（参加者八名）に同行し、木南さん始め、スタッフのオニール陽子さん、斉藤里織さんにお話を伺った。

●背景理解「ものづくり教室」と「和紙の里を訪ねる旅」

和紙の普及活動、学習会「ものづくり教室」では、ちぎり絵を始め様々な作品を作るが、これらは和紙の背景理解に支えられて欲しいとの願いから、



斉藤里織さん オニール陽子さん 木南裕美子さん

職人の話を直接聞く機会を設けている。教室で話を聞く場合もあれば、「和紙の里を訪ねる旅」で、じっくり産地を味わい勉強するツアーもある。現在までに教室では細川紙、伊勢和紙軍道紙の職人に話を聞いた。昨年の視察旅行は美濃、今年には吉野の宇陀紙の旅を企画した。旅のコーディネートは現地の方をお願いするのが一番という。

「産地の方はとても協力的で、しばしば家族の方々とも懇意になります。日本列島にはいろんな産地がありますが、住む人や環境、風土文化、歴史等で、求められる紙、作られる紙に個性があるの

「吉野宇陀紙を学ぶ」スタディーツアーの様相
PIARAS URL <http://www.piaras.org/>



で、現場に行つて五感をフルに使つて感じ、頭の中の和紙の風景の一部に蓄積して欲しい。」と木南さんは語る。和紙を巡る旅は、また女性の旅らしく、珍しい体験やグルメ探求、ワークショップ等のお楽しみも入れられている。吉野では、森林セラピー体験、吉野檜を使ったあかり作家の指導によるキャンドルライト制作、修験道の本山「金峯山寺」蔵王大権現御開帳夜間拝観、吉野本葛の話と葛きり作り体験、お寺巡りの後、宇陀の福西和紙本舗で福西正行さんの話と紙漉き体験…と実に盛り沢山の行程だった。

●和紙消費を促す「PIARAS」の「花紙絵」

和紙を使った商品開発のひとつが「PIARAS ペア」という手作りキットだ。熊の土台は、美濃の紙粉をリユースして岩手県で制作される。コロンとしたボディに、染色した手漉き楮紙をペタペタ澱粉糊で貼つて自分だけの和紙のボディペアを作る。東北復興チャリティイベントや世田谷区のワークショップ等で使われ、素材の珍しさを、暖かい紙の肌触りと可愛さが好評だ。キットは、手漉き和紙四色、首輪リボン、ボディが真っ白いオーガージーに入つて、ひとつ二五〇〇円。

スタッフは全員、ちぎり絵の教授免許を取得している。PIARASで教える和紙花の技法は「花紙絵」はなしえ（商標登録済）と呼ばれ、ちぎり絵も含めた「ベシックコース」（レッスン十四回＝四九〇〇〇円）、フラワーアレンジメントの技術を使った「アドヴァンスコース」（レッスン十五回＝五二五〇〇円）の二コースが用意され、ディプロマを取得した人は、PIARAS



PIARAS ペアのキット



ゴージャスな和紙花作品は、公認の教室を運営するホテルウエディングにも、ことが出来る。作る花は、ポインセチア、バラ、ピー、トルコキキョウ等、洋花を中心に十八種類。若い女性の興味を惹きつけるよう、あくまでスタイリッシュで現代的な和紙の花を提案する。

●和紙プロモーションとアーティスト支援

木南さんは、英国に本拠のある「社会貢献と文化交流が出来るビューティ」を選ぶ「ミス・ワールド JAPAN」の文化担当アドヴァイザーでもある。今年のミス・ワールド JAPANには、様々な機会を捉えて和紙のコサージュやブーケを提供し、和紙の啓蒙に二役買ってもらっている。柔らかな色合いの手漉き和紙のブーケやパーティーフラワーは見栄えがして、実に美しい。十月、東京・表参道ヒルズ内のギャラリーでは、「第二回 手漉き和紙の力」展を開催。出展しミスワールドでも和紙宣伝に協力



杉原 和紙の作品として、和紙の展示方法では何となく、今までに出ないユニークな作品が出来上がった。デパートの物産展など、今までのような和紙の展示方法では何かさ・明るさ・今を和紙にイメージ付けできる人気のこのギャラリーにこだわった。PIARASの展示会は多くの人を呼べることで定評がある。今年も動員数延べ千人のお客が訪れ、従来にない新しい和紙のインテリア雑貨、アクセサリー等の作品を楽しんだ。又、十一月公開のCGアニメのポスターに本美濃紙が採用されるなど、マッチングの活動も徐々に知られてきた。

思いついた事があると一日に何度もスタッフにスマホメールを送るといふ木南さんは、「スタッフが共通認識を持つことで自主的な行動が可能となり、よりパワーが増す。小規模でも女性のノリでパワフルに息長く活動していきたい」と語った。

レポート

■「和紙文化in越前」第二十二回和紙文化講演会」開催と関連イベント

例年、東京で開催されている和紙文化研究会主催によるシンポジウム「和紙文化講演会」が本年度は福井県和紙工業協同組合と共同企画で、十二月二日、福井県「越前市いまだて芸術会館」で開催された。講演会の翌日十二月二十五日には、漉き場の集中する大滝地区を中心に十二箇所の特徴ある紙を漉く工房や道具作りの工房が自由に見学できる「産地見学会」が行われた。当日は雨にもかかわらず、職人達とも交流できるまたとない機会とあつて、全国から和紙ファンや和紙関係の職人達が遠く宮崎や福岡からも集まり、参加者は三〇〇人を越える盛況となった。また、卯立の工芸館では関連企画として、様々なジャンル十七人の作家による新しい和紙の可能性を探る、記念展覧会「和紙の姿展 - Echizen 和紙を創作する -」（十月十五日〜十二月十四日）も開催され、越前和紙をヒントに様々な視点から和紙の未来を考える盛り沢山の催しとなった。



見学会は参加人数が多いため何班かに分かれて



11月、国の名勝に指定された「三田村氏庭園」も開放

●シンポジウム

「越前和紙の伝統と創造の世界」

折しも和紙がユネスコの世界文化遺産に登録される見込みとなったことを機に、大きな追い風を和紙に取り込みたいとの、本企画実行委員長石川浩氏の挨拶を皮切りに、講演とパネルディスカッションが行われた。講演内容は以下の通り。本レポートでは、そのうち、名児耶氏の講演を簡単にお伝えする。

- ・「料紙に見る藍と紫」名児耶明（五島美術館 常任理事副館長）
- ・「越前和紙と時代の関わり」増田勝彦（和紙文化研究会副会長）
- ・「受け継ぎ、研ぎすまし、そして革新」越前紙漉き職人のフロンティア精神」石川満夫（元福井県和紙工業協同組合理事長）

・「料紙に見る藍と紫」名児耶明（五島美術館 常任理事副館長）

藍と紫は、現在、当地の三代岩野平三郎が伝える越前の代表的加飾紙、打雲、飛雲に使われる色である。名児耶氏は、自ら撮った空に浮かぶ雲の写真と、装飾料紙の定番として生まれた雲紙（打ち雲り）、飛雲模様を重ねながら、色の意味、形状、模様の配置などの変遷を辿った。

紫は仏教の考えを反映し、藍も宝玉である瑠璃に通じ、奈良時代から尊重されてきた。雲紙（打雲）の最古例は、平安時代の伝藤原行成筆「雲紙本和漢朗詠集」二巻に見られ、紙の対角の上下の端に斜めにたつぷりと濃めの藍のむら雲が漉き込まれている。十一世紀中頃の「亀山切」は薄めの藍が主張しすぎず、ほんのりと品よく紙を彩り、「蓬菜切」には、亀山切より動きのある雲が二重に漉き込まれている。平

安時代以降は次第に藍の色が濃くなる傾向にあり、形状も自然の雲を模すのではなく、意匠性に意識がいく。鎌倉時代中期には、紫の雲も登場し、仮名ばかりでなく禅僧の墨跡にも使用されている。短冊が登場すると、その上部に藍、下部に紫の雲を配したものが定番となり、今日に続いている。

一方、飛雲の最古例は雲紙より古く、藤原行成筆の詩歌断簡と言われ、大きめの藍と紫の雲が浮遊するように漉き込まれている。その後、飛雲は次第に小型になり、鎌倉時代の古筆料紙には確認されていない。

・パネルディスカッション
「越前和紙の多様性とレインブランド」

三氏の発表後、増田氏を司会に、名児耶氏、石川氏に高橋裕次氏（東京国立博物館学芸企画部）、吉野敏武氏（元宮内庁書陵部修補師長）を加え、パネルディスカッションが行われた。

高橋氏は展覧会企画や文化財保存の他に、最近ではファミリー向けのワークショップも企画運営しており、古今和歌集の写本を見せ、唐紙を作る催しを行い好評とのこと。現代の子供達は、唐紙や紙の伝統的装飾のことも知らない。文化保存活動には、科学的かつ総合的な比較検討と紙の再現が重要だが、同様に文化財を見る目を育てる幼児教育も必要であると説いた。



名児耶氏は、概して雲のデザインや色の使い方は時代が下がるにつれて品格が減少している感があり、平安時代のような雲の味わいが再現できれば、デザイナーや書家の創造心を誘発する魅力ある和紙を提供できる。又、伝統模様に限らずこれだけ多様な紙があり、エコでもあり、歴史があることを、世界の人にもよく宣伝する術も磨いて欲しいと述べる。

吉野氏は長年の紙修復の経験から、現在作られる修理用和紙は、きれいすぎて文化財修復には使えない場合が多いと苦言を呈す。職人の性でつい美しい紙を作りたくなるのは分かるが、昔の古い紙をもっと勉強していただいで、色・繊維・チリの状態などが似たものを提供して欲しいと語った。

石川氏は、時代の流れに乗ると言っても、悪のりしてはならない。型破りはいいが、形無しになつてはいけない。革新は革命とは違う。即ち伝統を土台にしながら、知恵を活かすということが大切であり、越前の先人達がやってきたこの様な視点を、皆さんも活かして欲しいと語った。



記念展覧会「和紙の姿展-Echizen和紙を創作する-」

最後に増田氏は、レンブラントの和紙の鑑定について、最終的には繊維片のDNA鑑定?と聞かれるが、DNA鑑定を行うには、その当時の紙の繊維や材料に対する膨大なデータを蓄積していなければならず、事実上は無理。やはり越前の博物館に保存してある紙を頼りに、似た紙を何種類も抄造し、比較検討するのが最もよいと応えた。

■国際紙の歴史家協会(IPH)第三二回国際会議「The Roots of Paper」開催

報告者：江南和幸(龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター)

二〇二四年九月二日～二七日、ヨーロッパで最初の紙が作られたイタリアのファブリアーノ、アマルフィで、国際紙の歴史家協会(IPH)第三二回国際会議が七十人を超す参加者のもとで開催された。

ヨーロッパの報告の中心は、紙に埋め込まれた《情報》でもある「Water Mark」の分類・分析、紙が作られた国、工房の特定によりヨーロッパにおける紙の輸出入の歴史、出版文化の歴史、さらには経済史に及ぶ密度の濃い内容であった。私のポルトガル宣教師による「キリシタン版」、エルミタージュ美術館収蔵のレンブラントのプリントに使われた十六～十七世紀の鳥の子紙の発表は大変好評であった。パリ大学の子紙の発表は、ヨーロッパにおけるアジアの紙についての研究計画を報告したが、これには日本の研究者の参加がぜひ必要である。現在IPHの日本人会員は私一人しかおらず、和紙文化研究会などの会員が「言葉の壁」に臆せず(因みにヨーロッパの参加者の多くは英語がとて苦手であったが、堂々と発表していた)、IPHの会員となり、各国研究者と直接意見・情報を交換・相互協力できる関係を構築してほしいと感じた。



情報欄

●イベント情報

■平成27年 越前和紙 祈願祭・漉き初め式

時:平成27年1月5日(月)9:30～

場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)

■新年賀詞交歓会

時:平成27年1月5日(月)11:30～13:30

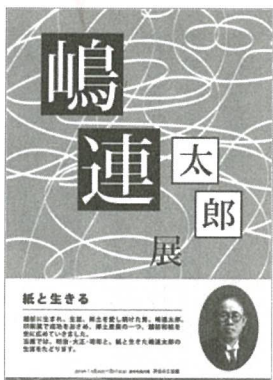
場所:生涯学習センター今立分館

■嶋連太郎展-紙と生きる-

時:平成27年1月5日(月)～3月1日(日)

場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)

※越前に生まれ、印刷業で成功をおさめ、越前和紙を世に広めた嶋連太郎。当展では、明治・大正・昭和と、紙に生きた嶋連太郎の生涯をたどります。



■福井県越前・若狭の物産と観光展(大宮展)

時:平成27年1月14日(水)～1月20日(火)

場所:埼玉県さいたま市 そごう大宮店

※体験・販売あり

■福井県越前・若狭の物産と観光展(東京展)

時:平成27年1月22日(木)～27日(火)

場所:東京新宿 京王百貨店

※展示・販売あり

■東京インターナショナル・ギフトショー春2015

時:平成27年2月4日(木)～6日(金)

場所:東京ビックサイト東館 展示

●「和紙」ユネスコ無形文化遺産に

ユネスコ(国連教育科学文化機関)は2014年11月27日、日本の和紙の無形文化遺産の登録を決定した。今回登録された和紙は、「石州半紙(せきしゅうばんし)」「(島根県浜田市)」「本美濃紙(ほんみのし)」「(岐阜県美濃市)」「細川紙(ほそかわし)」「(埼玉県小川町、東秩父村)の3紙。ユネスコ登録は目的の一つは伝承。登録は技術継承の団体があり、その団体が国の文化財保護法が適用される重要無形文化財に指定されていること、との基準で文化庁が申請したもの。3紙に限らず日本には良質な和紙産地が多く、業界ではこれを機に和紙全般に国内外の注目が集まり、地方活性化や市場拡大の足がかりにしたいと期待が高まっている。

編集後記

地方の博物館や文学館に立ち寄るのが好きだ。古文書などがすらすら読めたら、どんなに楽しかろうと思うが、変体仮名からしてちんぷんかんぷん。昨今は古文書を読解のサイトもインターネット上に結構ある。今号で紹介した橋口先生のサイトを頼りに少しずつ勉強してみようかと、年の初めに思うのであ〜。(よ)

季刊・和紙だより 第45号(2015年冬号) 発行日:2015年1月7日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人:福井県和紙工業協同組合 石川浩 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:Office YOMOSA 〒606-8225 京都府左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。